

「日々の理科」(第 2363 号) 2020, 12, 31

「晩秋の高尾山自然観察行(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ケーブルカー終点の「高尾山駅」から少し歩くと、ほどなく、山麓からの徒歩道(1号路)に合する。ここには「昔ながら」という感じのお土産物屋さんがあり、いろいろと「歩き食べ」ができる。しかし、この日は「八王子ラーメン」が「学習目標」の一つに位置付けられていたので、何も買わなかった。



高尾山には「スギの巨木」が多い。それも樹齢300年を超すような老木も何本もある。樹齢でこそ屋久杉にはかなわないが、スギらしい実にまっすぐな樹容をしているものが多い。



高樹齢の杉には、固有名称が与えられている。これは1号路脇にある「蝸杉(タコスギ)」高尾山のスギの中でもひととき有名なものだ。樹齢450年と言われ、高尾山のスギでは2番目の老木である。



今回の高尾山行の目的の一つは「綿毛探し」である。露木先生は「綿毛の大家」でもある。凡人なら100%見逃しそうなものも、確実に探し当てる。やはり「自然眼」は一朝一夕には身につかないものなのだろう。



今回一番見つけたかったのは「キジョランの綿毛」である。このイラストのようなもの「らしい」自然観察に限らず、「探しているものはなかなか見つからない」ものである。今回もキジョランの綿毛はなかなか見つからない。白いものは何でもキジョランの綿毛に見えてくる。



私は「キジョラン」と聞いてきっと「貴女蘭」という意味で、美しいランの一種だろうと思っていた。しかし、ランとは無縁のガガイモ科の「つる性植物」で、見た目は「クズ」(マメ科)によく似ている。白い綿毛の特徴から「鬼女蘭」という意味らしい。できれば浮遊している綿毛を見たいと思った。